

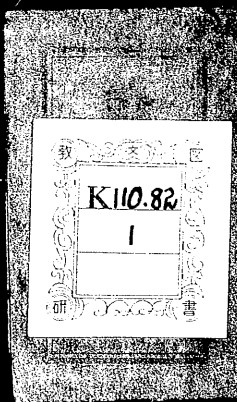
B|2|6

30|7|0



小學讀本

自一至四



文部省編纂

小學讀本 卷一

明治六年三月師範學校彫刻

小學讀本卷之一

第一回

凡世界に住居する

人に五種あり○亞

細亞人種○歐羅巴

人種○レイ人種

○亞米利加人種○

亞非利加人種なり、

○日本人も、亞細亞

人種の中ふり、



歐羅巴人種



レイ人種



亞非利加人種



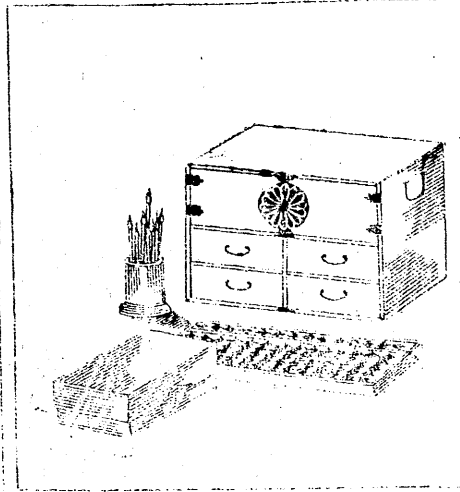
人の誓古に種々ありといへども、先づ書を讀み、
字を寫し、物を數ふことを、學ぶを、第一の務め
とに、○幼稚のとき、必ず學校に行きて、誓古を
ふべし、○學校に到りても、何事も、師匠の教へ
に、順ひて、只管勉強をべし、

何事を學ぶにも、出精するを第一とに、○出精せ
ざれば、多くの事を、覺ゆることなし、
一事にても、覺えたるとき、能く氣を附けて、こ
れを、忘るべからむ、

初めより、多く覺えんと、思ふとき、却て忘るゝ

こと多く、故に少し、充覺え、一事をも忘れど、は
怠りなく、習ふとき、自然と、多くの事を、覺ゆべ
し、

幼稚のとき、先づ日用の、道具の名を覺え、其用
の方を、知るべし、○筆も、字
を寫し、又、画を寫し、道具
あり、○算盤も、物を數ふ、
道具あり、○文庫も、書物を、
入る、箱あり、○簞笥も、衣
裳ふだを入る、器あり、



又、平生食するもの、名を覚えて、これを採へ、食物とふは仕方を知るべし。○食物とふべきものに種々あり、

第一、穀物ふり、○穀物も、米、麥、豆、粟、稷、黍の類ふり、○此品も、皆、田又え畑に作りて、其實を取り、炊ぎて、食物とふし、或え焼きて、食物とふはふり、



第二、肉類ふり、○肉類も、獸肉、鳥肉、魚肉の類ふり、○此品も、焼きて、食物とふし、又え、煮て食物とふ

るものあり

第三、菓物ふり、○菓物も、葡萄、橙、梨、梅、桃、柿、蜜柑の類ふり、この品も、多く生にて、食物とふし、○柿も、塩漬とふして、食物とふはもあり、

第四、野菜の類ふり、○此品も、畑に作るものと、野に生むるものあり、○多くは、煮て、食物とふし、又塩漬とふはものあり、○總て、野菜も、葉と根を、食物とふす、又、實を食物とふ



人の努めも種々にて、士、農、工、商とも、皆別々の學文あり、されども、幼年のとき、習ふべき學文も、みふ同トことなり、これを一般の學文といふ。○この學文を、習わざれば、何れの業をも、學ぶこと、能わざ。

故に、人は、六七歳に、至れば、皆小學校に入りて、一般の學文を、習ふべし。○小學校に、士、農、工、商とも、皆習ふべき、學文を、教ふる所あり。凡世間の、人々に、賢きものと、愚るものあれば、ども、皆幼稚のときより、學校に入りて、能く勉強

を、し、事を、覚えざるものあり。○人、一たび讀みて、事を、覚えれば、已む、これを百たび、讀むべし。○人、十たび習ふて、事を、知れば、已む、これを千たび習ふべし。○個様は、怠りなく、勉強を、し、必す、事を、覺ゆるものなり。○愚るものにて、多く、事を、知りたれば、賢き人と、あるものあり。學校にありて、舊古を、するものより、必す、遊歩の時間あり。○此時間にて、遊歩場に出で、思ひのまに、遊歩して、身を、勤う、心を、慰むべし。○勉強を、することあれば、遊歩を、甘樂みあり。

遊歩を、樂みと思ふ、舊古の時間、怠らむ、勉強
をべし、

遊歩場に出で、男兒の、遊
び戯るゝことも、種々あれ
ども、總て、危き遊びを、あそ
べうらむ、○輪を廻らし、又
も、風を揚げ、又も、球を投ぐ
るあどを、宜しとて、○相集
りて、遊ぶとき、自分も樂
み、朋友をも、樂ましむべし、



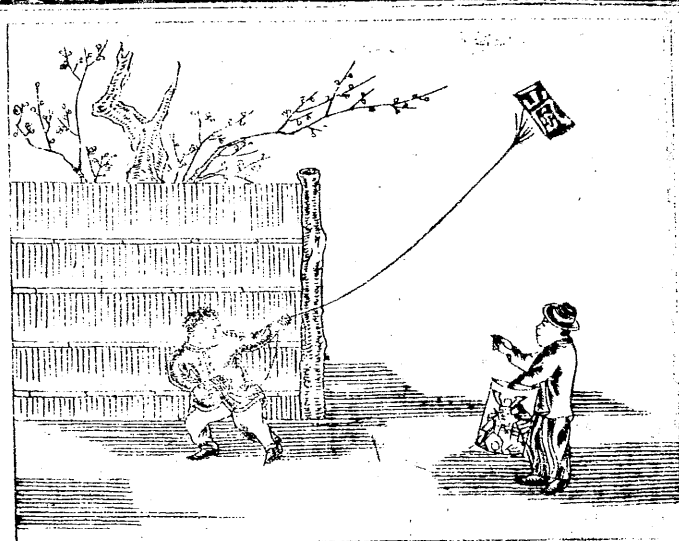
女子の遊びも、男兒と異りて、
駆け走るあどの、遊びを、あそ
べうらむ、○朋友と、連を合ふ
て、遊ぶとき、睦しく親みて、
何事も、物知うに、あそべし、



第二回

我等も、河の中に、行つんと欲す、○我等の、此河の
中に、入るを見よ、○私も、汝と共に、此中へ入らん
と欲す、○汝も、好むことあらむ、此中へ行くべし
○我等も皆此中へ、入ることを得るや、○汝も、今

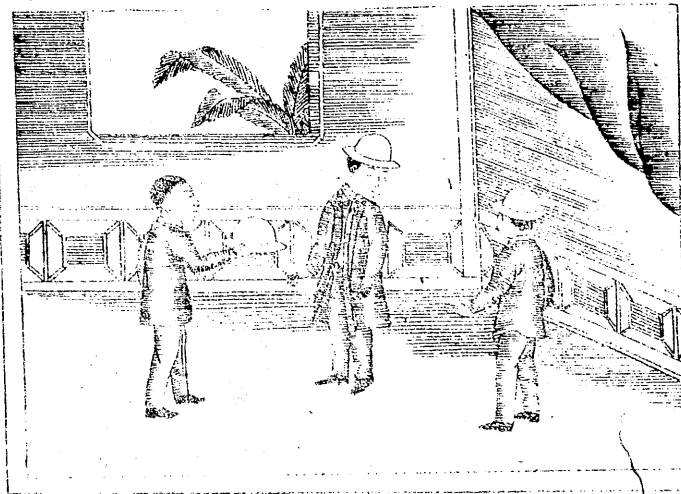
深水に入らんと欲する
 や、○汝も、出づることを
 得べきや、○今汝は濕ふ
 たり、○遠く、渉るべから
 ず、○陸へ上りて、乾すべ
 し、○今汝も、この小舟に、
 乗らんと欲するや、○汝
 も、この小舟の、動くを見
 よ、○小舟に乗りて、走る
 べからず、



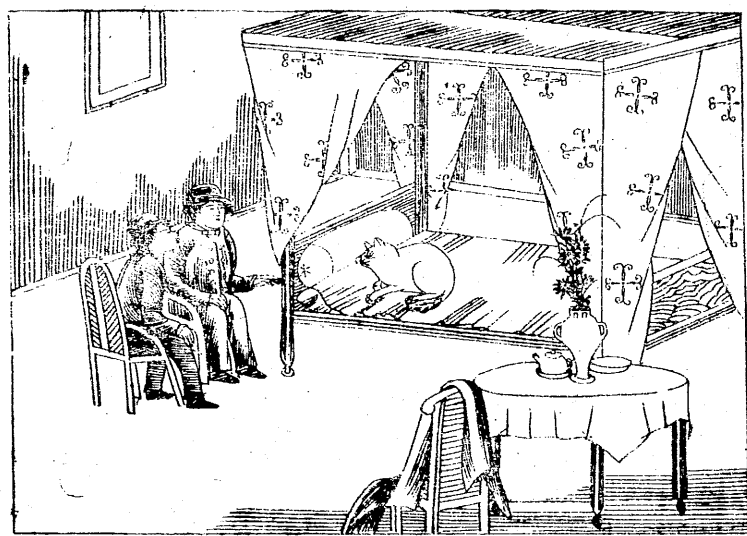
此小兒も、新き服を持て
 り、○彼れが、服を持ちて、
 走るを見よ、○彼れも、服
 を空中に、飛せんと、思
 へり、○汝も、服の揚るを、
 見んと欲するや、○服を、
 空中に、登りたるとき、心
 を用ふるべし、○糸の水
 に懸ることあり、

彼れも、新き帽を持てり、○彼れ、の、古き帽も、彼れ

たり、それゆゑに、喜んで、新
きものを持てり、○新き帽
にも、能く、心を用ゐるべし、
又それを濡すべからず、○
人の小兒も、頭に、帽を被
ふれり、○私の帽も、古きゆ
ゑに、彼人も、私に新き帽を
持てと云ふ、○此小兒も、長
きマントルを着たり、

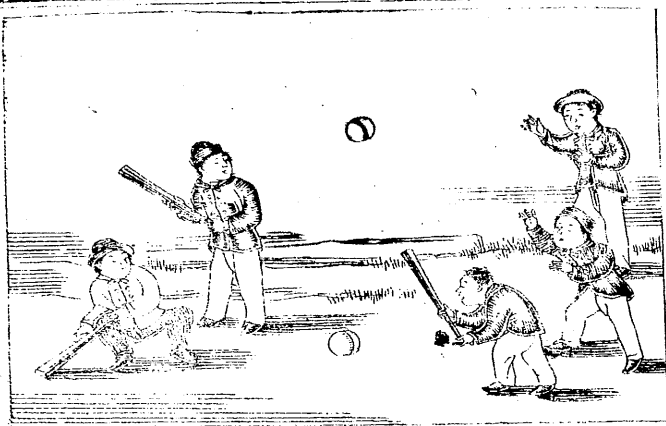
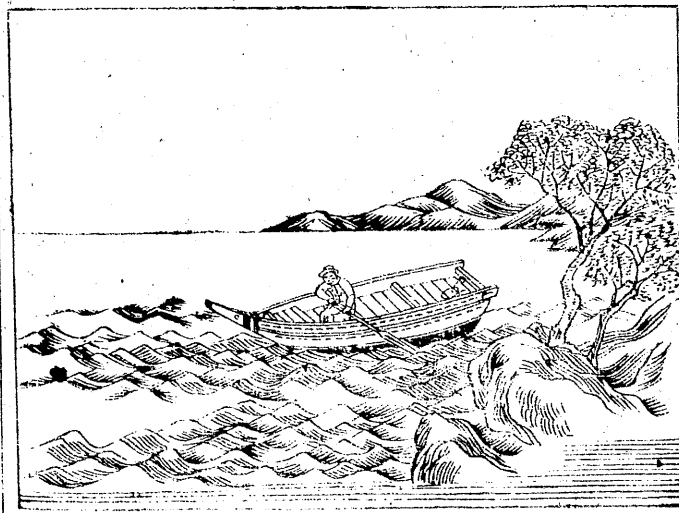


此猫を見よ、○寢床の上に、居れり、○これも、よき

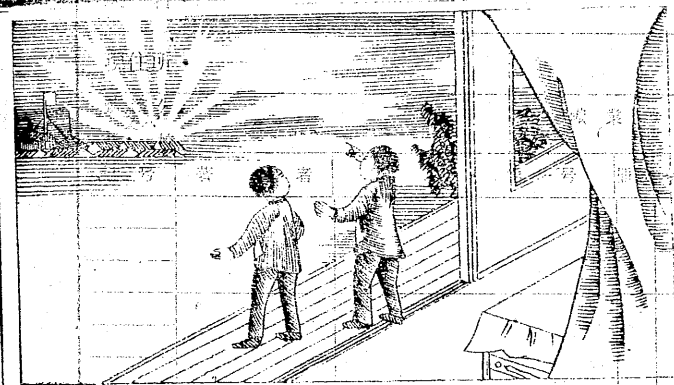


猫に、いあらば、寢床の上
に、来れり、○汝も、猫を追
ひ退くるや、○私の手を、
載するときは、猫が私を、
噛むべし、○猫も、餘所へ、
行くべきや、又も此所に、
留るべきや、○猫も、此部
屋の中に、留るといへど
も、寢床の上に、来るを許
さず、○汝も、猫が、鼠を捕

るを見よや○それ、大なる鼠にあらず、
汝も、小舟に乗りたる、人
を見よや、如何にして彼
れも、小舟を動かすや、○
彼れも、櫂を以て、小舟を
漕けり、○小舟も、湖水の
中にあり、○魚も、湖水の
中にありといへども、深
水に、あるゆゑに、見るこ
と能はず、

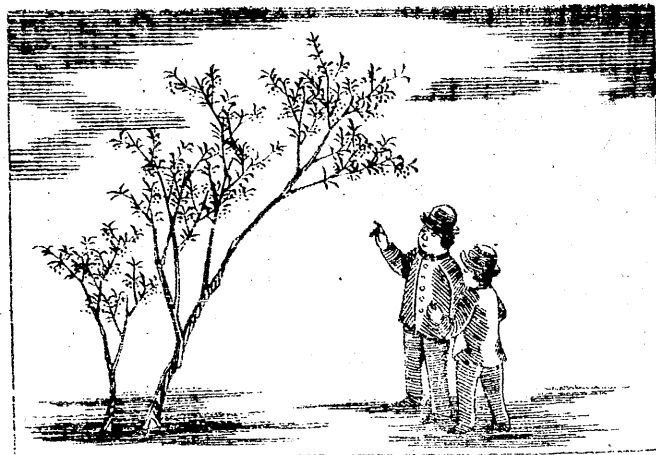


彼れも、球を蹴く遊べり、汝も、
それを見よや、○私も、棒を以
て、球を、打つを見たり、其球も、
堅きものなるや、○これも、柔
かなる、球なるゆゑ、人に當る
とも、傷けることなり、○小兒
等も、球遊びを好み、○それ
も、遊ぶに、善きことなれども、
終日遊ぶべからず、又熱き日
にも、長く遊ぶべからず、強き熱さに、觸るべから



大陽の登りたるとき、我等の
起き出づべき時刻の来れりと
知るべし。○大陽の登りたる
きに、猶寢所に、卧すべからず。○
我等、大陽を見ると、日の出
を見ることを得ず。○汝、大陽
の赤きときを見しや、大陽の赤
色なるとき、多く早すること
あり、

これ、何の樹なりや。○そ
れ、海棠の樹なり。○汝、
海棠の中に、蕾のあるを見
くや。○此樹、赤き蕾にて
満てたり。○私に、蕾を取
り得べきや。○それをむ、今
取らばからず。○今暫く過
ぐると、其蕾、皆花を開き、
奇麗なる、赤き海棠となる、
其とき、汝、海棠を取らば、

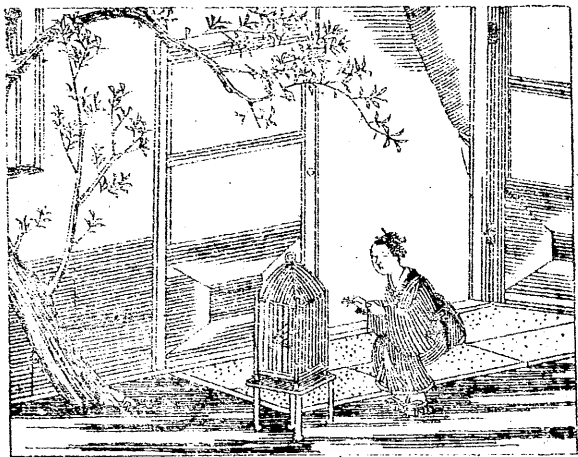




彼人も、牝雞を、養ふ爲に行き
たり○汝も牝雞の食餌する
を見しや○汝も老いたる牝
雞の、速うに食するを見しや
○それと、與ふるほど、食する
や○否、それ程多くも、食し得
ず○牝雞も、何を食するや○
彼れも、穀物を食せり、

第三回

彼女も、鳥を捕へて、鳥籠に入れたり、○汝も、彼鳥



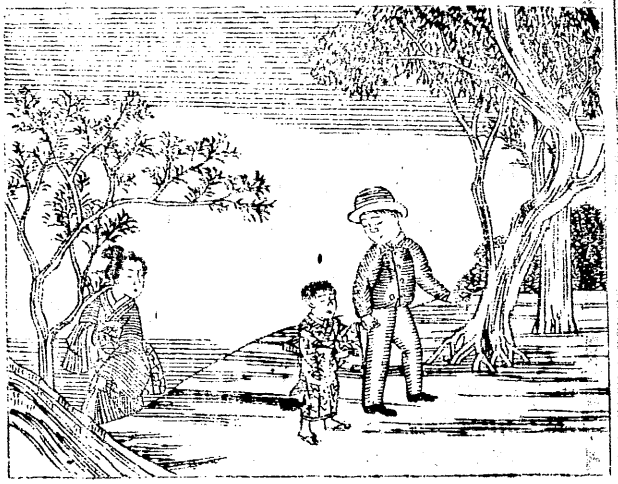
を、飼ふを見しや、○此鳥も、馴れたりや、又も、暴る
ことありや、○此鳥、今も、馴れたりといへども、
以前も、よく暴れたれ、○汝
も鳥の歌を聞くことを好
むや、又好まざるや、○私も、
歌を聞くことを好み、又尚、
鳥を見ることを好み、○
鳥も、跳るや、又も飛ぶや、○
これと、木の上へ飛び上り、
又木の枝に息へり、○此鳥、

籠より出づることを好むや○若、籠より出づるとき、再び歸り來るや、又を飛び去るや、

我も、惡しき小兒を好まず、且、これを遠ざけんとす。○惡しき小兒たりとも、好むことありや、○善うらさる小兒にても、傷くことな、然れども、これと共に、行くことを好まず、



彼れも、彼小女の爲に、信切なりや、○然れ、彼れも、信切にして、彼小女の、倒れさる爲に、手を取て、導



けり、○彼等二人も、路に迷ふべきや、○否、彼子も、能く路を知るゆゑに、彼等二人も、路に迷ふことなし、○彼等も、森の中を通るを恐るゝや、○否、恐るゝことなし、○彼れの母が、彼れに任したるゆゑに、彼子も、小女を

導きて、家に在ると、同く安全なり、○若、家に歸らんと思ふとき、歸ることを得べし、

汝も老人の杖を携ふるを
 見しや、○何に由て、彼れを
 杖を用ゐるや、○彼老人も
 路傍の石の上に息ひ、其手
 を杖の上に置きけり、○彼れ
 の顔と、白髪あるに由て、彼
 れの、年老いたるを知り、又
 老年に由て、體の屈みたる
 を知れり、○老人も、杖を倚て歩行す、杖なくして
 何故に、歩行し難まや、○彼れも、起つことを得べ



きや、又も歩行することを、得べきや、○彼れも起
 つことを得、又歩行することを、得るといへども、
 速りに、走ること能はず



茲に、四人以上の人あり、○汝
 も此人の、年老いたるを知る
 や、○此人も、皆手に杖を持ち
 たる、老人と同く、年老いた
 り、○汝も此人を、善き人と思
 ふや、○此人の顔も、善き人ある
 べし、○此人も、白き髪ある也

師範學校

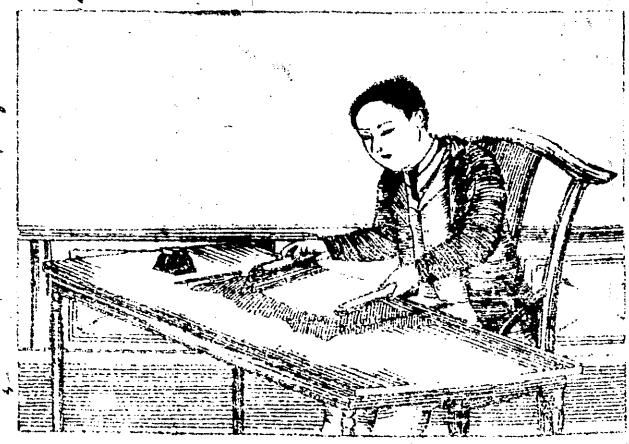
師範學校

るに、老人あるべし。○我等も、箇様ふる顔を好めり。



彼等の持ちたる、笛の名を如何あるや、○此を、喇叭あり、○彼等も、老人あるや、○否、彼等も、老人にあらず、○皆小兒あるや、○彼れも、小兒にあらず、少年あり、○彼等、常に立ちて、坐することなきや、○彼も、皆手に、帽を持てり、

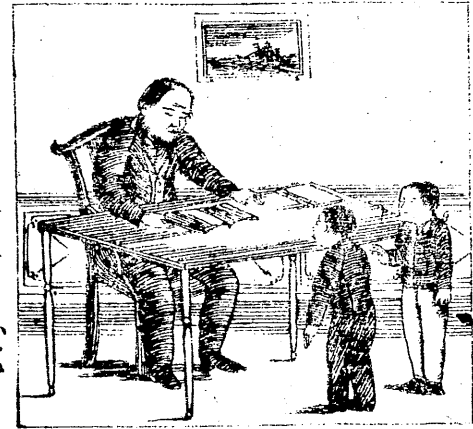
汝え、此人の、幅紗の中に、何を持つと思ふや、○それ、本なりや、○否、巻物なり、○何の巻物なるや、○汝え、其巻物なることを、説き得るや、○汝え、此人の、目を見たりや、○彼れ、目え、巻物を見たり、○其外、汝え、何を見しや、○我え、墨壺と、筆を見たり、○此人も筆を操りて、巻物に書き、其巻物を讀むこと、本を讀むが如し、



小學讀本卷之一

十三

市範學校

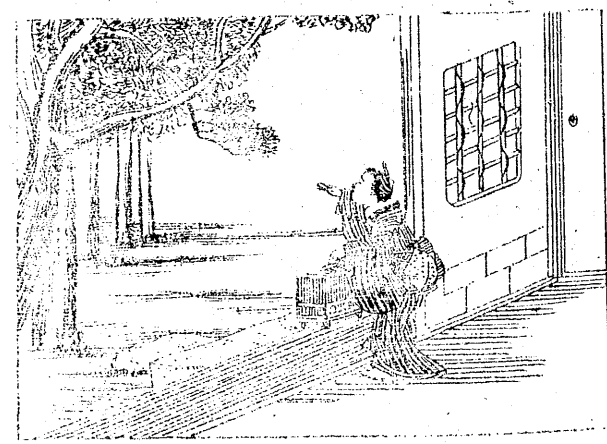


色々の教へを、説き示すことあり、

汝え、此小女子を見、や、○何ゆゑに、彼れえ、其手を揚げ、や、○彼れえ、鳥を入れたる籠を持ちたり、然れども、彼れえ、心を用ゐること、何からず

良き老人も、我が好みに従ひて、我に聽く、むるや、○彼れえ、小児を愛するや、○然り、彼れえ、善き小児を愛す、されども、更に惡しき小児を愛することなし、○善き小児なれど、

て、鳥を養ふこと能えざるゆゑに、鳥え彼れが持つや否や、速うに逃げ去りたり、○鳥が、逃げ去りたる時、森の中に飛び入りたり、○此とき彼れえ、手を揚ぐると、何の用にも立ちがたく、○彼鳥え、飛び去りたれを、再び捕ふこと能えず、○彼れえ、鳥籠に、心を用ゐることなく、又鳥を養ふこと、能えざるゆゑに、我え、鳥の逃げ



たを喜べり、○鳥は自由なることを好む、



誰う、鳥の聲を、聴くことを
好まざるや、○汝も、亦鳥を、
見ることを、好まざるや、
鳥は、水に在ることを好み
て、巢を造り、兒を養育す、○
鳥は、小鳥なり、雛の卵に、
巢を造れり、○かゝ鳥は、頭
に、總あり

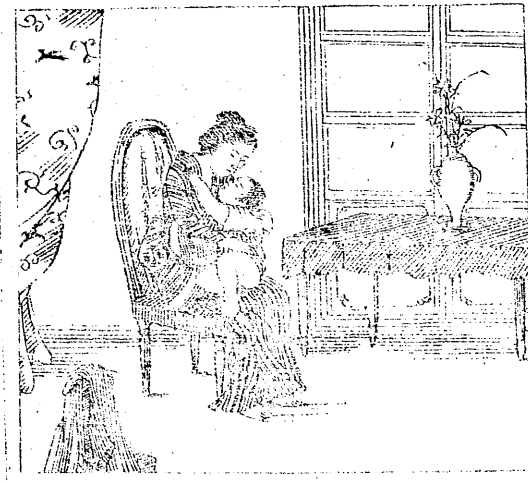
第四回



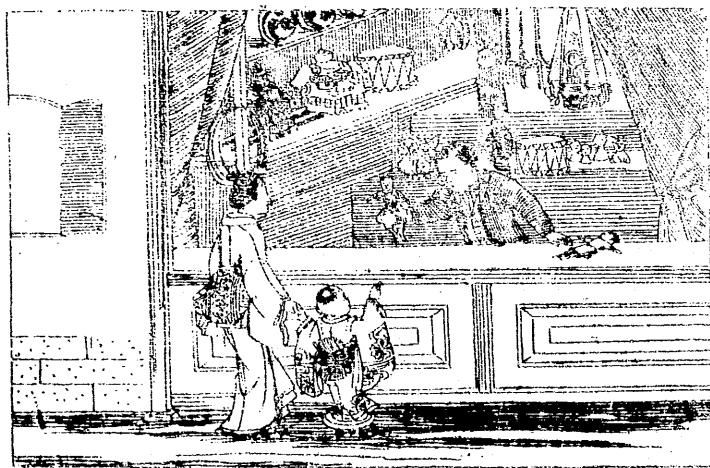
此女子を愛ら—き人形と、輪を持てり、○汝も、輪
と、人形を好むや、○汝も、人形を、大切に弄ぶや、○
汝も、人形を、舞—得るや、○此
女子も、輪を廻え、鳥に、雛を
持てり、○輪を、速々に廻え、
に、速々に、走らざるを得ず

此女も、小兒を、愛すとおもふや、○又小兒も、此女
を愛するや、○汝も、此兒の、美—き顔を見たりや、
○此女も、甚だ此小兒を愛す、○又小兒も、此女を
愛すること、思ふ、○我も、此美—き顔よつきて

説くん。○彼れも、長き髪あり、○其巻縮する短合を見よ、○彼れの足も、裸體なれども、此所も、暖氣なるゆゑに、凍ゆることなし、○汝も、此兒の名を知るや、○否、我人、其名を知らず、



母が、小兒を携へて、人形を買ふ爲に、小開物屋に行きたり、○汝も、此店に、多くの小開物のあるを見たりや、○母が、小兒に向ふて、何れの人形を求



むるやと問ふに、小兒も、自ら好む人形を、指し示せり、○此小兒も、人形をかり弄びて、飽くとき、輪を弄ぶことを、好むべし、○其外、店に列ねたる品も、皆小兒の好むものなれども、此小兒も、よき娘なれど、人形の、みを愛し、脂く心を用ゐて、傷むることあり、

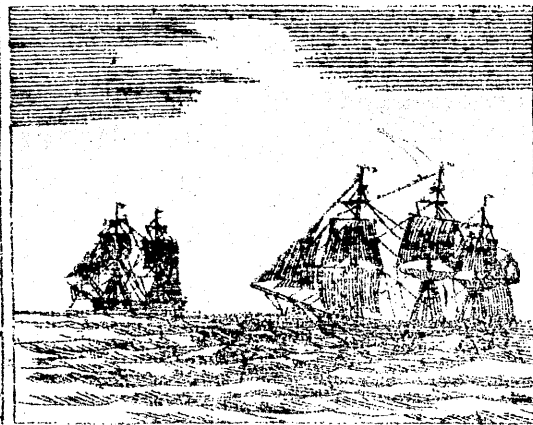


梟を、終日、古木の枝にをりて、夜に入ると、始て飛び去る。○これ、大なる鳥にて、大なる聞き眼あり。

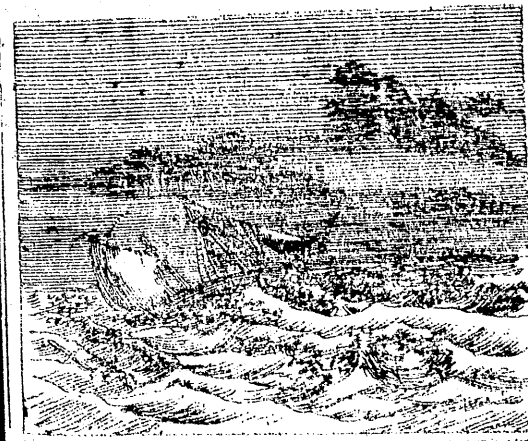
馬に乗りたる人あり。○如何に、彼れも、早く走るや。○汝も、馬に乘ることを好むや。○私も、馬に乘ることを好むなり。されども、彼れの如く、早く走ること、を好まず。馬を静うに、歩



ます。ことを好むなり。○何故に、此馬も、早く走るや。○彼人ぞ、馬を鞭うつゆゑに、早く走れり。○此人の後へ向きたるを見よ。○彼れも、木を見るなり。茲に、小船と大船あり。小船にも、二本櫓あり。大船にも、三本の櫓あり。汝も、櫓を見よ。や。○汝も、櫓の上なる、帆を見よ。や。○汝も、小船に乗りて、海を渡るを好むや。大船にて、渡るを好むや。○風吹きて、浪の立つ



ときに、我も船に乗りて、渡海するを好まず。○我
 ら、風の吹くときにも、陸にあるを好む。○これ、
 蒸氣船なるや、○否、蒸氣船にあらず、帆舞船なり。
 見よ、茲に、暴風の中、海上に浮
 める船あり。○櫓も折れ、帆も
 破れたり。○恐ろしき有様な
 りや、○此船も、帆舞船なるべ
 し。○蒸氣船ならむ、斯く難
 儀することあらず。○これも、
 軍艦なりや、○否、商船なり。



此小兒も、幼年なるゆゑに、水
 中に、深く入ること能はず。○
 此小兒も、何をなさんと欲す
 るや、○これも、小き蓮の葉と、
 大なる葉を、取らんと欲す。○
 も、陸より、遠く離れて行く
 とき、水も又深くなるべし。

一人の男も、左の手に、帽と、杖を持てり。○此人も
 圓き顔にして、肥えたる腮なり。又長き髪あり。○
 彼れも、長き上着を着たり。○此上着も、煖なる

べし、○帽を被ふりたる人も、
 上着を着ずして、肘を現せせ
 り、これも、業をなすゆゑなり、
 ○彼れも、我部屋へ、人の來る
 を喜び、又人の話―を、聞くこ
 とを好み、○一人の少年も、
 只彼等の、話―を聞き居たり、
 人々、草を積み舉げたり、此草の、枯れたるとき、こ
 れを、枯草と云ふ、○枯草も、車に載せ、これを馬に
 引うせて、小屋へ運び入る、○草の枯れたるとき、さ



し、急ぎ、小屋へ運び入る
 べし、然らざるとき、雨に遇
 へて、再び滞るゝものなり、
 ○此枯草も、牛馬の、食とな
 すなり、○馬も、枯草と、麥を
 食すれども、又甚だ、麥を好
 みて食す、

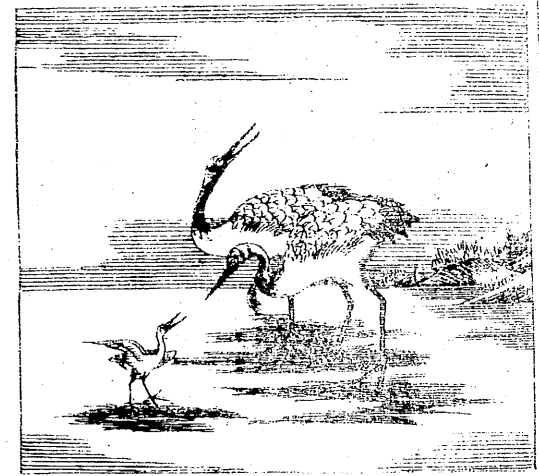
人に、耳目、口、鼻あり、○鼻も香を嗅ぎ、耳も聲を聞
 き、口も食を味ひ、又物を言ひ、目も物を見つもの
 なり、○人も、只一つの鼻あり、一つの口あり、され



ども、二つの目と、二つの
 耳あり、○只一つの口に
 して、二つの耳、二つの目
 あるゆゑに、見聞く如く、
 多分に語るべからず。○
 又人にも、二つの手と、二つの足とあれども、只一
 つの口あり、ゆゑに、業を多くなして、話一を少
 くすべし。

第四回

鶴も、大なる鳥にて、雛のときも、茶色なれども、生

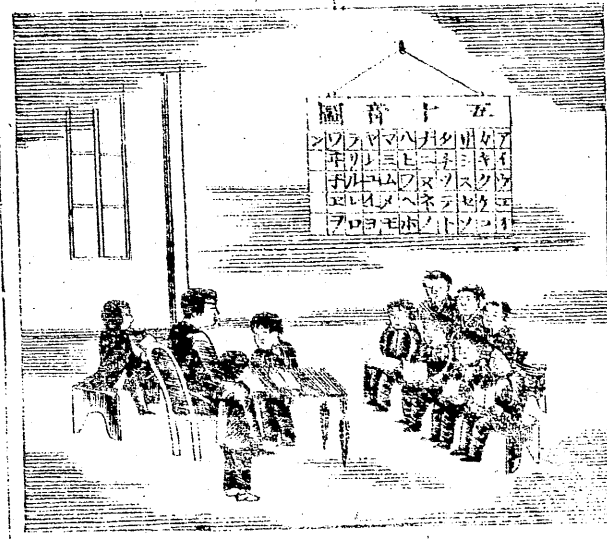


長―たるとさきも雪の如く、
 白き色となつたり。○この
 鳥も、長き頸にて、長き脛あ
 り。○此鳥の卵も、大にして、
 白きものなり。○汝常に、鶴
 を見るべし。○ありや。○否、常
 に見ること少し。○これ

水中に入り、又高く飛ぶことあり、

教師も、學校へ來れり、茲に、數多の小兒と、小女子
 あり。○此等も、皆書物を讀み、事を學べり。○學校

にも、石盤と、布き物と、書物あり。○汝も、學校へ行くと、物を好むや。○汝も、書物を讀み、又語を綴ること、を能くするや。○私も、書物を讀むことを好めども、未だ能く讀むことを得ず。



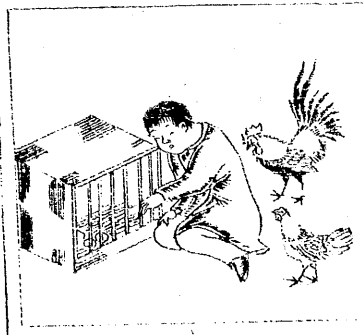
今日も、寒き日なり。○雪が、地上にも、樹にも、池にも、積れり。○小兒も、氷の上を、滑べることを好



めり。○此遊びも、甚だ危きものゆゑ、能く心を用ゐるべし。○もし、氷より落つることあれば、身を傷ふべし。○善き小兒も、此危き遊びを、好むことなし。

此小兒も、卵の傍へ、手を遣れり。巢の中にも、六つの卵あり。○これ、鶏の卵なり。○鶏も、巢の傍に在りて、飛び去らず。これを卵を取らるゝことを

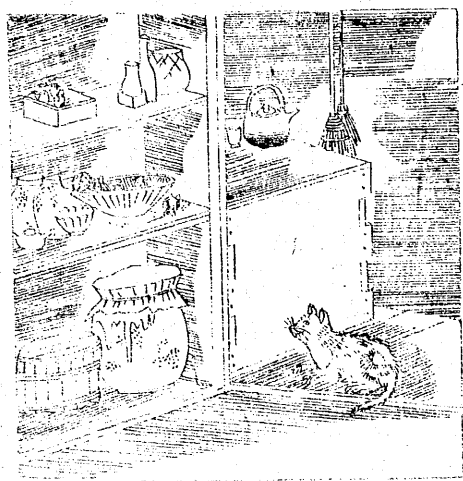
憂ふるゆゑなり。○雞も、部屋の中に、巢を造れども、又樹の枝に、巢を造る鳥と、草の中に、巢を造る鳥あり。○卵にも、白きものと、青きものと、薄黒き、模様のものあり、



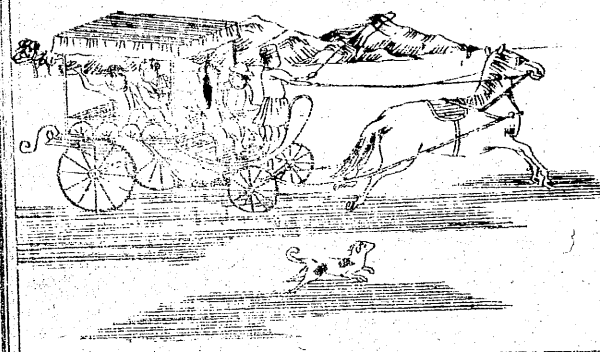
菊と、桔梗の花あり。○汝も、菊を愛するや。○小兒も、桔梗の花を折りて、手に持ち、娘も、大なる菊の花を、手に持

てり。○菊の花も、多く黄色なり。○桔梗の花も、多く紺色なり、

數多の鼠あり、これに日中に、出づることなし。○日の暮るゝとき、直に出で、夜中に至りて、各々遊び出づ。○此等の遊び出づるとき、諸所を歩き、又棚に登り、糊又穀類を食す。○然れども、猫の聲を聞くと、一時に静まりて、喋ぐことなく、驚きて、忽ち穴



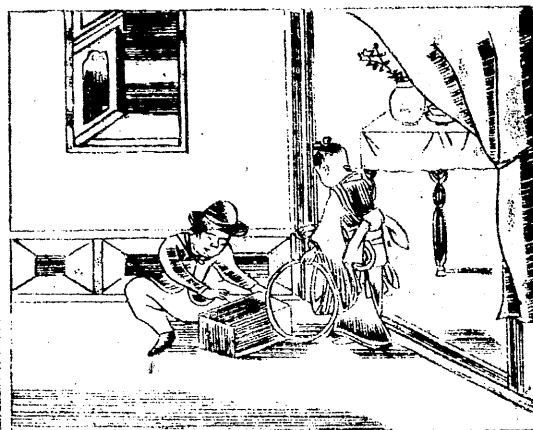
の中へ逃げ入るなり、○猫の居るとき、鼠も遊び出づることなり。



茲に、馬車ありて、數多の小兒と、女子を載せたり、○汝も、此小兒と女子を、知れりや、○然り、私を、是等を知れり、○これ皆、我學校の人なり、○彼れの大馬と、共に、走れり、○

彼等も、汝を見たりや、○彼れも、私を見るときに、其帽を脱げり、我も彼れを見るときは、必ず帽を脱がざることなり。

此箱のうちに、響きあり、○汝も、これを、何の響きと思ふや、○此箱の中にあるを、鼠又も猫を、うべし、汝も、何と思ふや、○此響き、甚だ小なるゆゑに、私を、小き鼠なりと思ふ、猫にもあらず、大なる鼠にもあら



た、



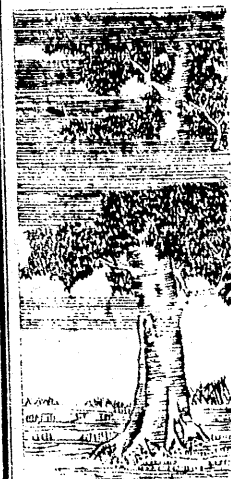
茲に、四人の小兒あり、其中二人を坐し、他の二人を立てり。○一人の老人ありて、此小兒等に、神明の語を聞かせり。○又老人の云ふに、總て小兒を、神明を畏敬して、我身の幸を願ふとならむ、善き心を持ち、善き道を行ふべし。○小兒のとき、春の時候の如

し、正に我心に、智恵の種を蒔くときなり、智恵の種を蒔くとも、學文することなり。○生長して、壯年に至れむ、人間の働くべき時と、思ふべし。○老年に至れむ、冬の時候の如し、茲に、手に杖を携へたる、老人あり、足も不自由にて、目も暗くなれり、されども此老人も、一時は小兒にて、其時、今の汝等の如く、早く走り、又遊び戯れたり、

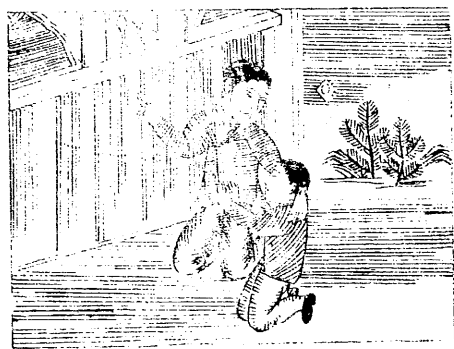


○今も、足も震へるゆゑに、小兒の肩に倚りて、此れが爲に、導りたり。○見よ此老人を、冬の時、候の、至れるなり。○汝等も長く、春の時、候に、あるべうら、必む、此老人の如くなるべし。

茲に、楓の大本あり。○汝も、此木の年を経たる、數を知るや。○今此水を、横に、切り、離して、木目の輪を、數へ見るべし。○木目の輪を、一年に、一つ、充増すものなれむ。輪の數にて、此木の年を経たる、數を知るべし。○此木も、今



大になりて、枝も、空に至るといへども、其初め、僅り一つの種より、生じたるなり。其種を、至て、小きものにて、汝の手に、持ち得べきものなり。

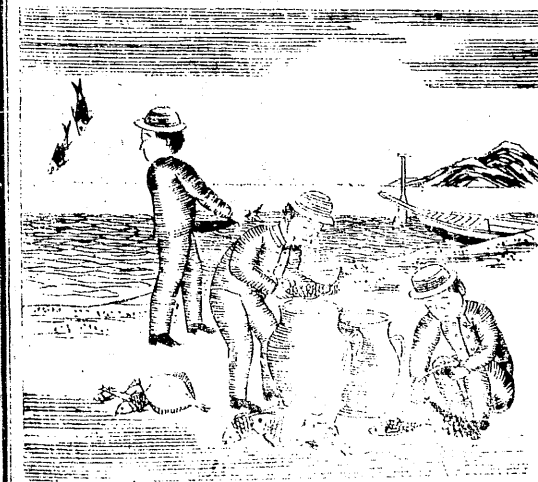


天津神、再拜、昨夜も、無難に過ぎて、大幸なり。今朝、夜明けて、光りを下し給ふにより、父母の息災なる顔を見ることを得たり。多謝。○私を、導き給へ、幸を與へ給へ。も、過ちあらむ、免し給へ。○私の、死するとき、天道へ導き給へ。拜、天津神と、天津神と。

主神、高皇產靈神、神皇產靈神、天照大御神を云ふ

第六回

此人等も、小舟に乗りて、濱邊に入り、網を以て、魚を捕りたり。○濱邊に、網を引くとき、これに罹りたる魚も、大なるも、小なるも、又良きも、惡きも、皆一同に、捕ふることを得るなり。○汝も茲に、三人の男あるを見しや、○又彼等も、數多



の魚を捕りたるを見しや、○海水の中にも、多分の魚あれども、中に良きものと、惡きものとあり。○一人の男も、惡き魚を二匹、海中、投げ入れたり。○又一人も、屈みて、大なる魚を、網に入らし所なり。○汝も、二つの網あるを見たりや。○此網に魚を入れて、満ちたるとき、我が家に持ち歸るなり。

此處も、如何なる場所と思ふや、○此處も、花園なり。○茲に數多の、美しい花あり。○此處ら、き小兒と、娘との、遊び場所に、設けたりと思ふや。○汝



此小兒等を喜んで遊ば
 思ふや、○左の手に、鋏を持
 右の手に、帽を持ちたる小兒
 あり、○小兒の後に、杖を持
 たる娘あるを見しや、○一
 の娘も、爪を入れたる、籠を持
 てり、○又、花園に行きて、遊
 ぶとき、猥りに、花を折り、菓物
 を取るべうらむ

茲に、葡萄の棚あり、○一人の男も葡萄を積み入

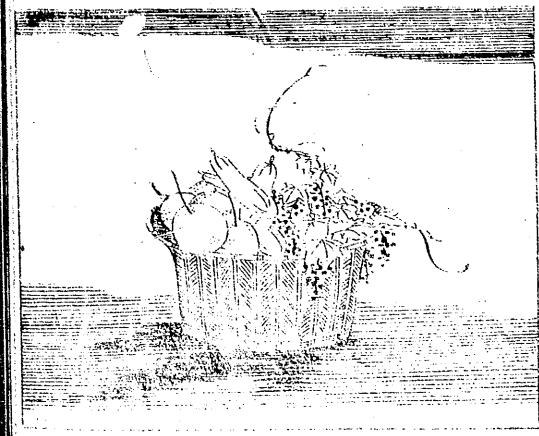
れ、籠を持てり、○又腰
 を掛けたる、一人の女あ
 り、其膝の上に、小兒を抱
 けり、○小兒の兄も、立ち
 て、葡萄の房を取れり、



此男も、花園を作る人なり、○傍
 らに、小兒あり、○此人も、小兒等
 に向て、猥りに、菓物を取るべ
 う、又花を、折るべうらずと云
 ふ、○又私も、菓物を取り、又花を

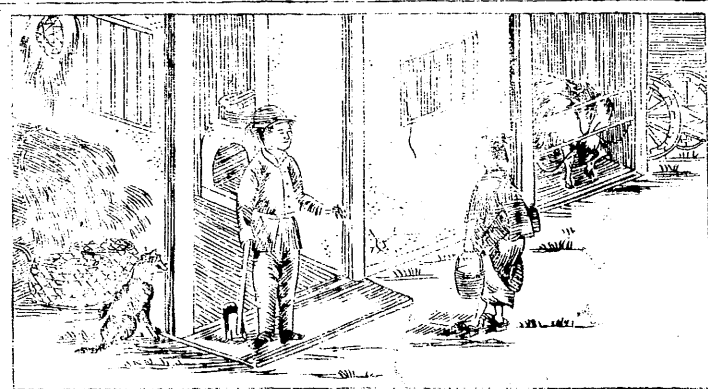
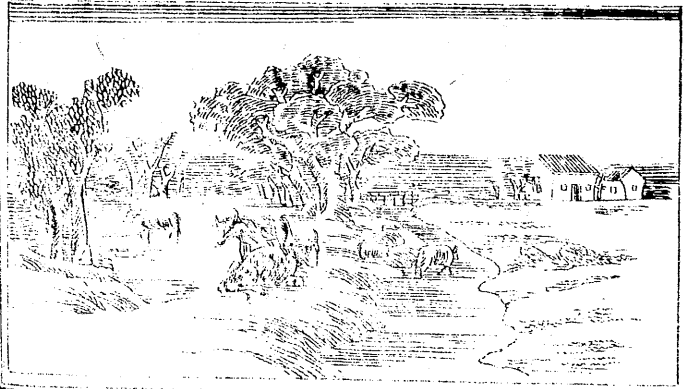
取りて與ふべし、故に小兒も自ら取るべからず
といふ、○もー此人の教へに、従はずして、自ら花
を、折りたちむ、再び花園に、來るを得ざるべし、

茲に、菓物を、積み入れたる籠
あり、○此菓物も、白瓜と、葡萄
と、梨子なり、○籠の外に、掛り
たるも、葡萄の蔓なり、○籠の
左に、其影あり、然れを汝も、大
陽のある方を知りたるや、○
大陽も、籠の右にあるべし、



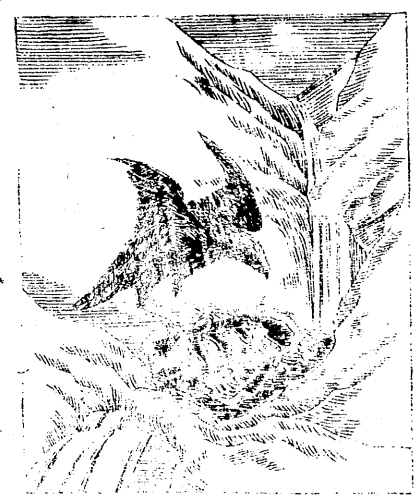
曰の出を見よ、○今日も、晴れたる天氣なり、○鳥
が鳴きて、木より木に、飛び移れり、○草も、青々と
して、葉に露を持てり、○數
多の農夫も、野に出で、或
と畑を耕し、或も草を芟れ
り、○一人も、鋤を擔ひて立
てり、其傍に犬あり、○これ
も、彼れの畜へる犬なり、○
晴れたる天氣にも、必ず野
に出で、働くものと知る

今も、日中になりたり、○大陽の
 照らす處も、甚だ煖うなり、然れ
 ども、樹の蔭も、較、涼きゆゑに、
 卧したる牛と、立ちたる牛あり、
 ○又一匹の牛も、煖うさを、凌ぐ
 爲に、河に行きて、水を飲まんと
 す、○河の上に、橋あり、○人も皆、
 日中になりたれむ、晝飯を食す
 る爲に、家に入りたり

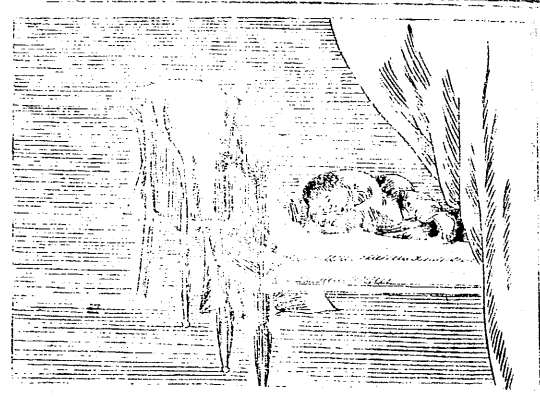


日暮になりたり、○人も、野より歸り來り、牛も、庭
 にあり、○一人の女も、庭に出で
 る、牛の乳を絞り、手桶に十分、乳
 汁を得たり、○此女子も、新しき
 乳汁を、飲むことを好み、○汝
 も、戸の傍に、犬のあるを見たり
 や、○此人々も、甚だ忙しき人と思
 ふや、○日暮になりたれむ、今日、
 刈りたる草を、積み入るゝ爲に、
 忙しきなり、

鷹を、尤つよき鳥にして、他の鳥の、恐るゝものなり。○鷹を、高く空中に飛び行く、○高山の岩の間、又そ茂りたる、大水の枝に、巢を作らるものなり。○されども、食物を得る爲に、平野に出で来ることあり。○今雀を、捕り來りて、雛を養ふを見よ、



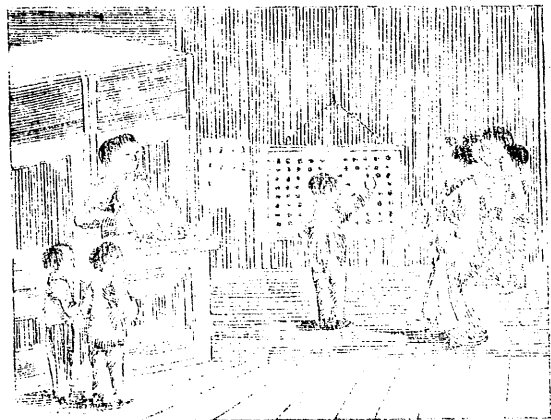
天津神を、常に我を守り給へるゆゑに、私を、獨りにて、暗き夜中に、歩行するも、恐るゝことなり。○



眠りたるときも、神を守り給へるを以て、暗き所に、獨り眠るも、恐れず。○暗き所にても、神を、能く見給へるを以て、人の、知らざる所にても、恐るゝことをなせむ。忽ち、罰を蒙むるものなり。○人の、知らざることにても、神を、能く知り給ふて、善きものに、幸を與へ、惡しきものに、罰を與ふ、

第七回

汝も物を數へ得るや、○もー父が汝に、林檎を十一
 一與へ、母が汝に、林檎を五つ、
 與ふるときも、汝も幾つの林
 檎を得るや、○十六の林檎あ
 り、○汝等も物を數ふること
 を學ぶべし、○大なる數と、小
 き數を知るべし、○汝も石盤、
 又紙に、數字を書き得るや、
 ○もー數字を書き得ぬなら、を努めて、之を書く
 ことを學ぶべし、○物の數を知らざるも、愚なる



人なり、

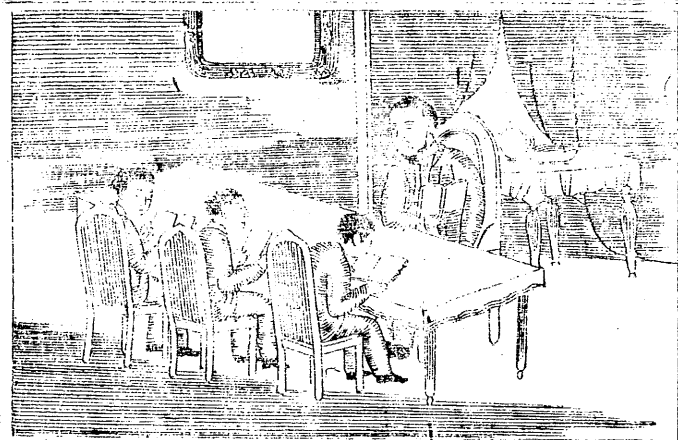


机の上に、十一の梨あり、この中
 三つを、母が持ち去りたり、然る
 ととき、机のうへに、残りたる梨
 も、幾つとなるや、○残りたる梨
 も、八つあり、

汝等も、文字を書き得るや、○
 文字を書き得ざるときも、人
 に書狀を、贈ること能ふ、夫○
 このゆゑに、汝等も、文字を書



くことを學ぶべし、



汝等も、文字を、讀み得るや、○
文字を、讀むことを、知らざれ
を、人より贈りたる書狀を、讀
むこと能くす、○書物を、讀む
こと能くざれむ、事を、知るこ
となし、○見よ、事を、知らざる
人も、智慧ありとも、物の用に
立ち難し、○ゆゑに、文字を、讀
むことを、知らざれむ、愚なる

人となるなり、○汝等も、努めて、文字を、讀むこ
を學ぶべし、

馬も、誠に、入用なる獸類にて、
陸地にて、荷物を運ぶに、毎
日、入用なり、○馬も、大なる獸
類にて、長き顔あり、○立髪あ
り、○背の上に、荷を負ひて、遠
方に、送るものと、人を載せて
走るものと、車を引くものあり、

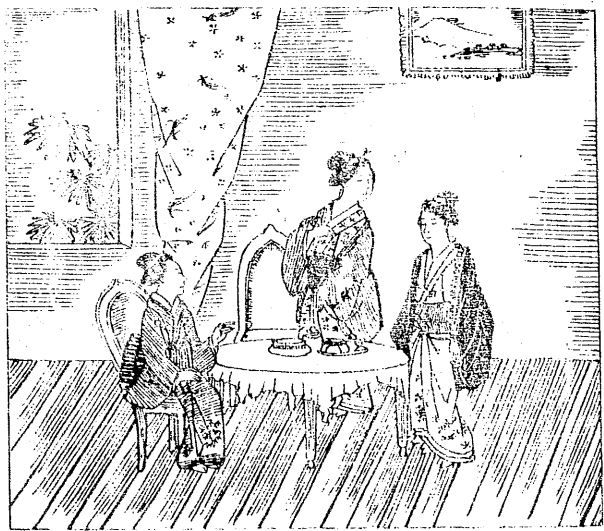


牛も、馬と同く、入用なる獸類にして、能く車を

引き、又し荷を負ひて、遠方に送るものなり。○されども、牛も人を乗せて、走ること能む。○牛の肉も、食物となりて、能く養ひをなし、又牝牛より、乳汁を取ることを得るなり。



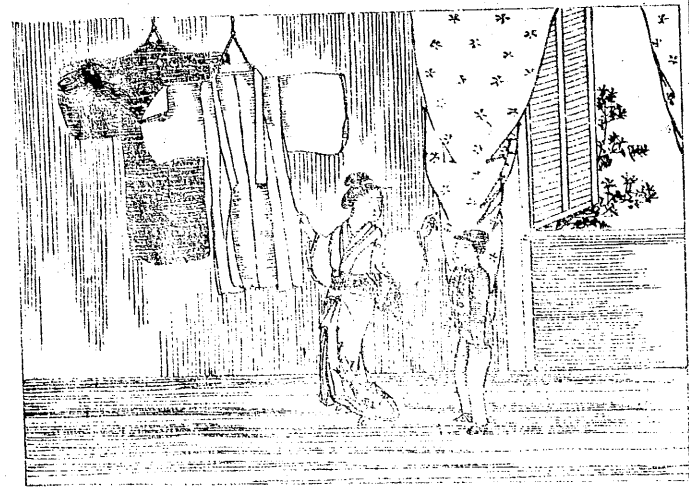
汝の着たる衣裳も、何と云ふ織物なるや。○黒き絹の衣裳なり。○私の羽織は、黒羅紗なり。○汝も



絹と水綿と、羅紗の中、何れが第一に、暖うなりと思ふや。○羅紗も、毛織物なれど、第一に暖うなり。其次に、暖うなるものも、水綿なり。絹も、又其次なり。○絹も、柔くなれども、身を暖むること少し。

茲に、白き單衣と、紺色の單衣あり。○汝も、何れを第一に、暖うなりと思ふや。○白き色も、太陽の熱

を、引くこと少きゆゑに、夏
を涼しけれども、冬を寒し、
○紺色も、太陽の熱を、能く
通ほすゆゑに、冬も暖かな
れども、夏も熱し。○見よ人
々、夏も多く白衣を着、冬も
多く、紺色の衣裳を着るこ
とを、この道理あるゆゑな
り、



茲に、二枚の圖あり、皆人の、働く所を画がけり。○



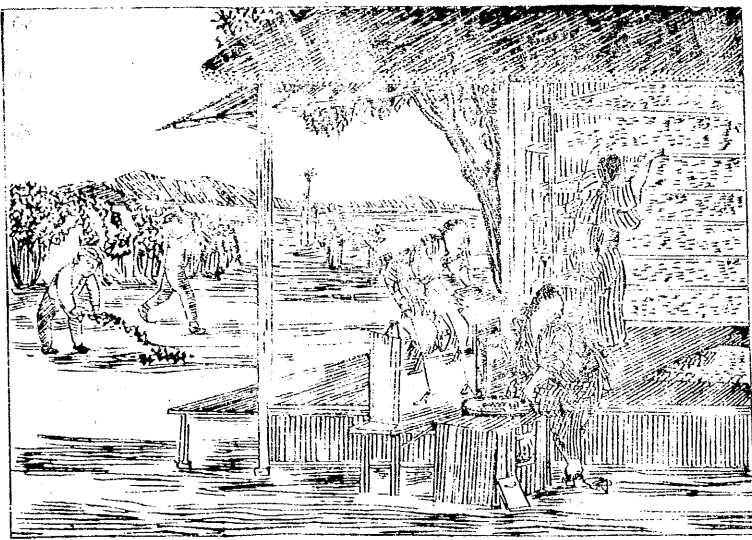
初の圖も、野に出で、
種を蒔く所なり。○こ
の人も、携へたる籠に
種を入れたり、この人
の、肘も脛も、現れた
り、これに熱きとき、日
中に出で、働くゆゑ
なり、

次の圖も、稻を刈りて、我家に、持ち歸る様なり。
又稻を打ちて、米を取る所を、見るべし。○此人々

の汗も流れて、地に落つるを見よ、○農夫も、個様に、働ゝざれど、穀物を得ることなし、○汝等常に穀物を食するときは、農夫の苦勞を念ふべし、



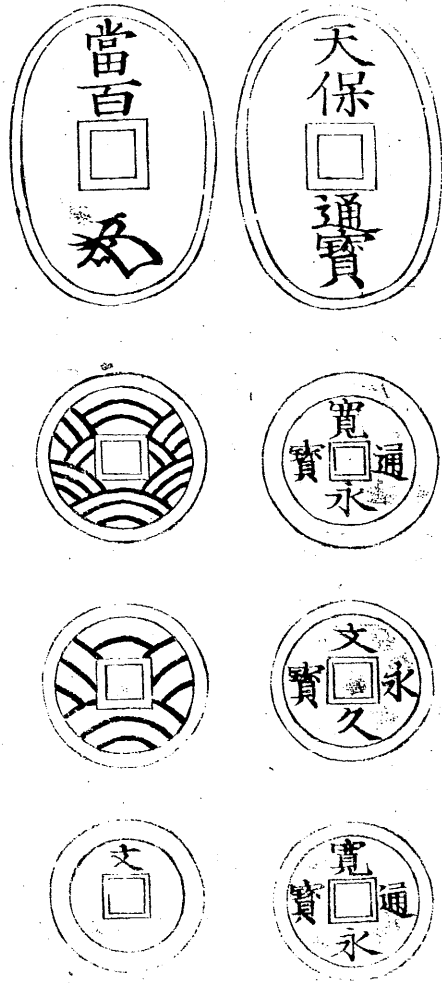
これを蠶を育ふ所なり、○茲に、三人の女あり、蠶を育ひたる所と、糸を取り擧る所なり、皆、朝早く起き、夜中までも眠らず、髪も美しく、揚ぐること能く、○日々、汗になりて、働けり、○又二人の男



あり、桑を取り、葉を摘む所なり、○此男も、野に出て、耕す人と同しく、肘も脛も現え、汗を流して、働けり、○個様に、數多の男女が、苦勞して、拵へざれど、米もなく、絹もない、○汝等、暖かなる衣を着たるときは、必ず、蠶を飼ふ人々の苦勞を忘

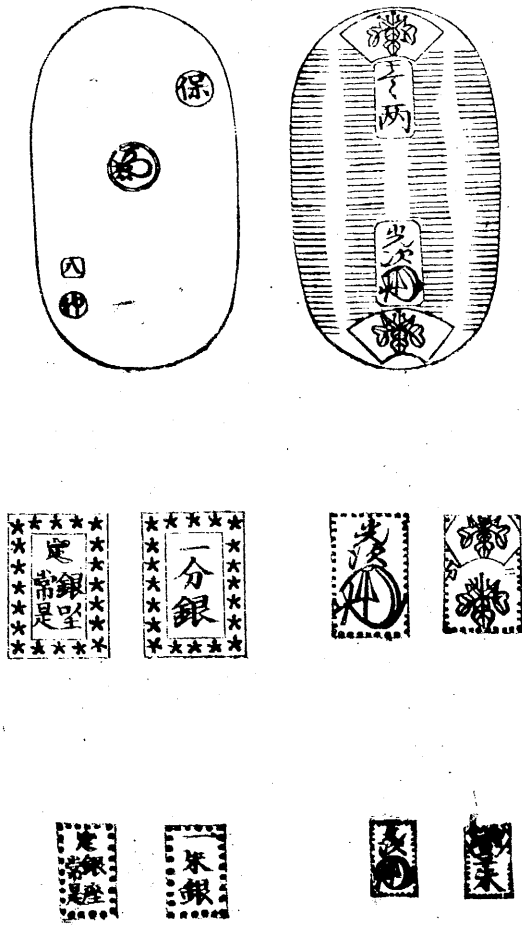
るべくらた

茲に、種々の貨幣あり、



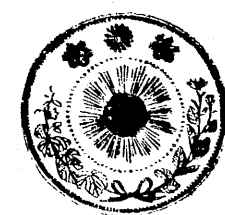
右四品の貨幣を、錢といふ、徳川幕府のときより

今日までも、通用するものなり、



此五品の貨幣を、金といふ、徳川幕府たりとき

の通用金なり、



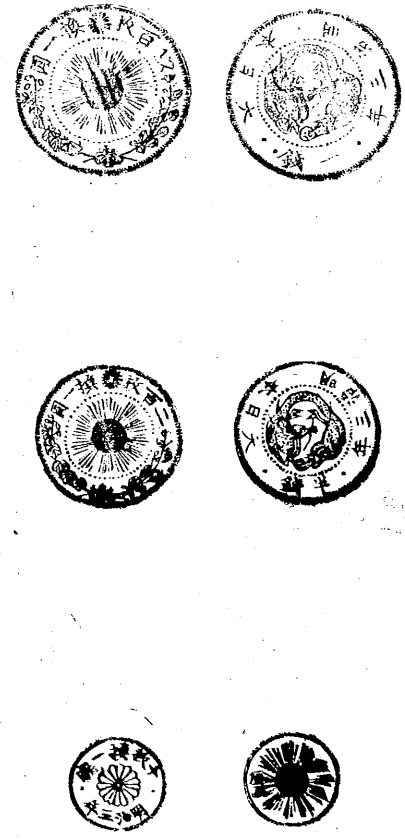
右五品の貨幣を銀貨幣と云ふ



右五品の貨幣を金貨幣と云ふ

貨幣の分類

貨幣の分類



右三品を銅貨幣と云ふ

此三種の貨幣は、政府の發行にて、當時一般通用

の品なり、

錢一文を、一毛といひ、十毛を一厘といひ、十厘を、
一錢といひ、百錢を一圓といふ、ゆゑに十二錢半
は、金二朱に當り、二十五錢は、一分に當り、五十錢
は、二分に當るなり、

貨幣の分類

貨幣の分類

小學讀本卷之二 終

小學讀本卷之二

第一回

此女兒も、人形を持てり、汝も、人形を見よ、や、○此
 人形も、愛らき人形なり、○汝も、人形を好むや
 ○然り、我も甚だ、これを
 好めり、○此男兒も、人形
 を持てるや、○否、男兒も、
 人形を持たずして、鞭を
 持てり、○人形も、亦衣裳
 を着て、靴をききたり、

